

## 第31回福岡県美しいまちづくり建築賞 受賞作品概要

●総評・講評 田上 健一 選考委員長（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授）

### ◆総評

優れた建築を表彰することにより、美しいまちづくりの促進を図ることを目的として制定された本賞は、今年で31回目を迎えました。

本賞では、「住宅の部」と「一般建築の部」の各部門で「大賞」および「優秀賞」が授与され、また住宅のリフォーム・リノベーション作品を対象として「(一財)福岡県建築住宅センター理事長賞」が授与されます。本年度は「住宅の部」46件、「一般建築の部」41件、計87件の一般公募による応募が寄せられました。審査は10名の選考委員による慎重な審議を経ていきます。

第1次選考委員会は9月19日に開催され、応募書類をもとに「住宅の部」の候補4作品、「一般建築の部」の候補4作品、「理事長賞」候補2作品を選出しました。また、第2次選考の現地審査は11月18日と12月2日に実施され、建築の内部・外部空間および周辺環境の視察を行うとともに、建築主・設計者・施工者等の関係者の説明を受けました。第2次選考の現地審査終了後に最終選考委員会を開催し、各受賞作品を選出しています。

「住宅の部」では、戸建住宅3作品、複合型集合住宅1作品の4作品が第1次選考を通過しました。いずれも地域社会や周辺環境との関係性を主題としており、本賞に相応しいものでした。「大賞」を受賞した「小屋の間」は、建築としての完成度が高いことに加えて、設計・施工の信頼関係、建築主の住まい方、既存集落における新しく開かれた関係づくりについて多くの選考委員の共感を得ました。優秀賞の「鞘ヶ谷の家」は、緻密な建築ディテールと抑制した住宅のボリュームとプロポーションが与える上質な空間が評価されました。

「一般建築の部」では、美術館、スタジアム、保育所、宿泊施設の4作品が第1次選考を通過しました。それぞれの作品が社会への高いメッセージ性を有しており、本賞に相応しいものです。大賞の「すばる保育園」は、田園に浮かぶ壁面とボリュームが描く曲線が、遠中近の地域景観を包含し連続する空間が創出されています。優秀賞の「北九州スタジアム（ミクニワールドスタジアム北九州）」は、スタジアムの一部を港に開くという、この敷地でしかないランドスケープを創り出したことが評価されました。

「理事長賞」には、駅前ビルのリノベーション作品と、駅舎のコンバージョン作品が最終選考に残り、新幹線のターミナル駅という複雑な関係性を有機的にデザインした「博多南駅前ビル（ナカイチ）」が受賞しました。

なお、本賞は福岡県が主催し、単に目立つとか話題になったものを表彰するということではなく、社会的かつ文化的に優れた建築を表彰することにより、建築文化を高めることが趣旨となっています。また、「美しいまちづくり建築賞」という名称が示すとおり、建築単体ではなく地域の価値向上に貢献することも重視されます。今後も、この制度が質の高い建築ストックの醸成に繋がっていくことを期待致します。

## 住宅の部 大賞

## 小屋の間

### ●設計趣旨

建築を敷地の対角上に配置し、分節されたふたつの領域（集落側に開放された外庭と山側のプライベートな内庭）を建築に内包された土間によって緩やかにつなげ、領域間に生じる「間」によって視覚的な解決策を講じると同時に、開放的な住環境を獲得しようと試みた。

建築の骨格は、1間半のモジュールが連続する単純な架構で構成されている。その中の3つのグリッド（3間×3間）を室内とし、その間に外部化された土間空間と内部化された土間空間を挿入し、平面ではスタジオと居住空間が独立した状態を保つ一方で、断面では連続する小屋組みによって互いの領域が分断する事なく、ひとつながりの空間として場が拡張していく状態を創り出している。

### ●講評

「家」が「家」であるための原型を想起させる秀逸な作品です。

かつてボルノウ（Otto Friedrich Bollnow）は、「住居は、それが人間に生の確かな安定性の感情を媒介すべきものだとするれば、長い過去をも反映しなくてはならない。このことのためには、住居のなかで『歴史』をもっているものすべてが欠かせないのである」と記しました。ボルノウが言うように、この作品からは、見た目や内装、最新の設備ではなく、「懐かしさ」、「心地よさ」、「無駄さ」など、人と空間とのやりとりの自由さとリアリティが存分に感じられます。「家」の中に地域の人も入ってくるような、日本の伝統的な「家」の姿もみることができます。

在来構法による無駄のない架構形式と、素型に潜んだディテールへの細やかな配慮が、骨太な空間を創りあげています。

建築としての完成度が高いことに加えて、設計者と施工者の相互理解と信頼関係、建築主の住まい方、既存集落における新しく開かれた関係づくりなどについて、多くの選考委員の共感を得ました。



撮影：坂口写真事務所 坂口正臣

（所在地：糸島市）

## 一般建築の部 大賞

## すばる保育園

### ●設計趣旨

小郡市の郊外に建つ保育園である。敷地の西隣には神社の鎮守の森が隣接し、東側と南側に水田が広がる。設計に際してはこうした豊かな周辺環境と積極的に関係づけたいと考えた。

保育園として3歳未満児と3歳以上児の空間をはっきり分けるため、2つの庭を確保した。ひとつは西側の鎮守の森へ、もうひとつは南側の水田に向けそれぞれの園庭を確保し、それぞれの保育室で囲んだ。室内外の子ども達の動きを見渡せる結節点に管理諸室を、角にステージの付いたホールを配置した。

ホールの屋根はコンクリートのスラブを隆起させることで15mの-spanを柱梁なしで架構する自由曲面シェルであり、その形状は水田越しに連なる花立山の形状と呼応する。

### ●講評

郊外の田園風景の一部が鮮やかに再構築され、時空を超えた場の価値を生み出しています。

2つのゆるやかな曲線による庭、連続するルーフ、隆起するシェル構造のドームなどが、外へ外へと関係を求めています。敷地境界を超えて、完結することなく、このような建築が周辺環境へ接続し拡がれば新たなまちの「すがた」が紡がれるのでは、と想起させられます。

解像度の高い景観上の特徴に加えて、こどもの一回性による動きやコミュニティに対するスケールやモノのあり方も精緻に設えられています。構造・材料の清々しいまでの割り切りからも、建築の建ち方、生命感を感じることができます。

田園に浮かぶ壁面とボリュームが描く動的な風景、正面性のない建築がもたらす連続性、こどもたちの記憶の底に残るであろう空間体験の創出などが高く評価された作品です。



撮影：太田拓実

(所在地：小郡市)



### ●設計趣旨

多忙な夫婦2人が互いの時間を大切にしながら快適に過ごすための小住宅である。敷地は緑豊かで閑静な住宅地、高低差6.3mの北東隣地越しには遥かに景色が広がる。計画に際しては、開放的な居間・食堂、それに接する趣味室、離れた印象の茶室と、その性格に応じた外部との繋がりに配慮することにより、生活の様々なシーンにおける心地良い居場所を設えている。居間・食堂は、北面することによって順光で景色を眺めることが出来るとともに、柔らかな木質、漆喰と相まって穏やかで落ち着いた空間となっている。趣味室は、緑を介して通りと内部が程良い関係を保っている。外観は、低い軒先のラインと板塀、植栽の緑が美しくバランスするよう注力した。

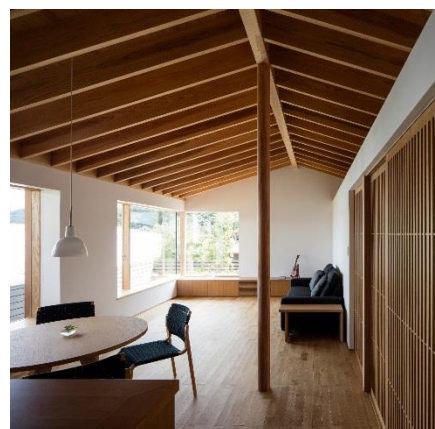
### ●講評

建築をつくるための「厳しさ」に満ち満ちています。

敷地高低差の読み取り、控えめなボリューム、そして連なる風景など、周辺の外部空間との連続性と親和性への「厳しい」読み取りと配慮。北向きリビングルームながらそれを感じさせない開口部の設定、距離感、流動的で破綻のない平面構成という、空間的な眼差しの「厳しさ」。軒先の高さを揃えた屋根、高さをむかえつつも抑圧されずむしろ開放感を感じる室内、そこから切り取られる景色など、スケールに対する「厳しい」操作。選び抜かれた木材や塗材、控えめながら美しい木製建具や家具など、「厳しい」材料選定や意匠的試み。

多言語的な物質性はここにはなく、施工精度の高さがこれらの「厳しさ」を支えています。そして設計者と施工者のこれらの「厳しい」建築に対する取り組みの姿勢が、住み手の優しく快適な暮らしをおおらかに包み込んでいます。

緻密な建築ディテールと、抑制した住宅のボリュームとプロポーションが与える上質な空間が高く評価されました。



撮影：石井紀久

(所在地：北九州市戸畑区)

## 【一般建築の部】 優秀賞 北九州スタジアム（ミクニワールドスタジアム北九州）

### ●設計趣旨

賑わいあふれる北九州市を創出することを目的としたスタジアムである。敷地は、JR小倉駅から徒歩約7分という利便性の良さに加え、敷地東側が全面海に面しているという、狭隘ながら魅力ある場所が選ばれた。この立地条件を活かすため、施設の顔となる「スタジアムプラザ」、そこから海に抜ける「にぎわいプロムナード」を設け、日常の地域活性化のきっかけとなる場を随所に設けている。各ゲートからスタジアム内のコンコースに入ると、一気に視界が開け、スタジアム全体とその背景に広がる関門海峡や山並みを望むことができ、スポーツと海と山の景観を同時に楽しめるといふ、他に類のない個性的な感動を得られるスタジアムを実現した。

### ●講評

「港に開く」。この一点のハイライトが高く評価されました。

ギリシャのオリンピアにはじまる陸上競技場、野球場、サッカー場などのスタジアムは、従来、フィールド周りの観客席という均質な高い「壁」に取り囲まれていました。野球場ではヤンキースタジアムやマツダスタジアムのような非対称かつ多様な形式の観客席や、サッカー場ではフィールドが海に浮かぶザ・フロートマリナーベイ、外部の色を変化させるアリーナツ・アリーナなど、周辺環境との境界として立つ「壁」を操作する競技場が存在しますが、隣接する港に観客席の一部を開いたスタジアムは世界的にも稀少なものです。

北九州という工業都市の機能性や合理性を現した、軽やかでシンプルな構造による控えめな観客席ルーフは、脇役としてこの新しいフィールドと観客席を引き立てています。

フィールド、海、山なみと連続するランドスケープにより、躍動感あふれる非日常の場を体験できる、記憶に残るオープン・スタジアムとなっています。



撮影：川澄・小林研二写真事務所

(所在地：北九州市小倉北区)

## (一財)福岡県建築住宅センター理事長賞

## 博多南駅前ビル(ナカイチ)

### ●設計趣旨

那珂川市の玄関口、博多南駅に隣接しながらも、利用者が少なかった市所有の建物を改修したプロジェクトである。コンセプトを「交換と祝祭の場、ナカイチ」とし、市場のように賑わいある場につくり替えることを目指した。各フロアごとに異なる「市」のテーマを与え、できるだけ既存を再利用しつつも市民に「変わった」と受け止めてもらえるよう、場に適切な色彩やサインなどにも気を配った。特に駅や人工地盤と繋がる2階には、市民が多様な活動を展開できる立ち寄りやすい場づくりの工夫を重ねた。外壁の塗替えには遠景から建物が立体的に見えるよう配慮し、駅へのブリッジの塗り直しにもゲート性を持たせるなど、周辺全体の景観の向上も行った。

### ●講評

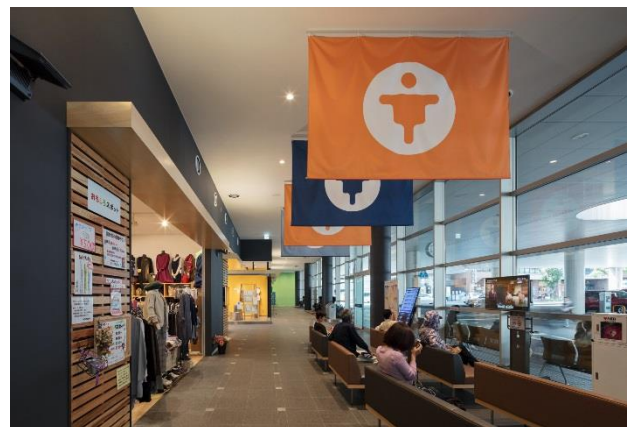
建築全体が「通り」のような空間となりました。

従前の駅前ビルは、交通結節点という絶好の立地性とオープンな屋上庭園をうまく生かすことができず、閑散としていました。それはあたかも、新幹線の速さやコンコースの単調さが延伸しているかのようなものでした。

リノベーション後の駅前ビルでは、諸室の垣根を取り払いながら空間的連携や流動性を高め、小さな家具の配置による溜まりにより、その速度を落として滞在性を高めることで、市民活動の多様な要求に即応する場が生まれています。鮮やかで視認性の高いサイン、外から差し込む光の操作など、スローな「通り」に相応しいアトラクターのリレーも場を演出しています。

那珂川の未来を描き、地域社会の発信に繋がる活動もこの場から創出されはじめており、街と駅を繋ぐ駅前ビルとして蘇りました。

厳しいコスト条件の中で生まれた新たなスローなこの「通り」には、その日その日で即興的な「市」が催され、発見と出会いが混じり合い、漢方薬のようにじわじわとゆるやかに、街の薬として効いてくることでしょう。



撮影：Yousuke Harigane

(所在地：那珂川市)